

人の形とモデル

—明堂図の指示するもの—

中 村 清

明治鍼灸大学 人文科学教室

要旨： 伝統的東洋医学の重要な一部である鍼灸医学は、経絡理論を基盤にしている。それは臨床的に経脈上の経穴を用いるが、それは人体図または人体モデルの上に表示される。その人体図にはいわゆる解剖図や人体模型とは異なった面がある。それを生み出している理論は、深く古典的世界観や宇宙観、そして生命観に根ざしている。その特徴をモデル論として考察する。そのモデルは結局のところ、究極的な真理を求める古典的な重層思考法に由来するものであり、天地自然そのものがいわば生きたモデルと見なされるからである。様々な文献に広く認められるこうした特徴は、中国の古典的科学に付随する倫理性、ホーリズムの世界観に関連している。

序 論

東洋医学は神秘的だとか、哲学的だとかいう印象を持たれることが多い。長い歴史を有する東洋医学の臨床的实践には、当然その背景となる理論が伴っている。それが現代の学問の考え方からすると、どんな種類の理論なのか。現代の伝統的東洋医学、それをさらに限定して鍼灸医学に受け継がれている理論の中でも中心的な経絡理論を、思想史の立場から、そしてモデル理論から検討する。基礎研究であるから、直接臨床的意味や価値を問うものではない。むしろ伝統医学の実践の土台についての新しい視点と理解を目指す論議である。

モデルは、何かに代わるものであることを本質とする。モデルを作製するその対象 (subject) と、その代わりになる作られたもの (model) との間の関係は様々でありうる。この関係の違いによって、いくつかの種類のモデルが区別される。対象が明確に認識されていて、モデルはそれを思い出させる機会になるだけでよいもの (レプリカ) から、何らかの仕方での対象の認識を助け、明らかにするための道具・機縁になるもの、さらには不明な事柄や言語表現などの困難なものを、隠喩で表すモデル (またはメタファー) までである。

この範囲のどこかにそれぞれのモデルが位置づけられる。

一般に比喩的表現の多い東洋思想は、モデル思考で溢れていると言ってもよい。これをモデルの語を用いて説明を試みる論も散見する。それがどのような種類のモデルなのか。それは思想文化の特質と関係しているのか。言語の特性に根ざすものなのか。即ち、語義の曖昧さ、多義性、文脈の複雑さ、また漢字の具体的指示法、例証の一般化などに関係しているのか。あるいはメタファーなのか。思想の具象性、本体思考、無の思想、実用性指向などと関係しているのか¹⁾。

(以下の論議で用いられている文献の引用ないし言及のうちで、邦訳文については意味を損なわない範囲で文章を適当に変更した場合のあることをお断りしておきたい。)

東洋思想 (中国古典医学思想など) における アナロジーとモデル

東洋古典思想にモデルという見方を持ち込むとどうということになるであろうか。前述のように、古典の文献にアナロジー思考と言える語や表現が顕著に見られるのは確かである。それは近代自然

平成9年1月16日受付。平成9年3月25日受理

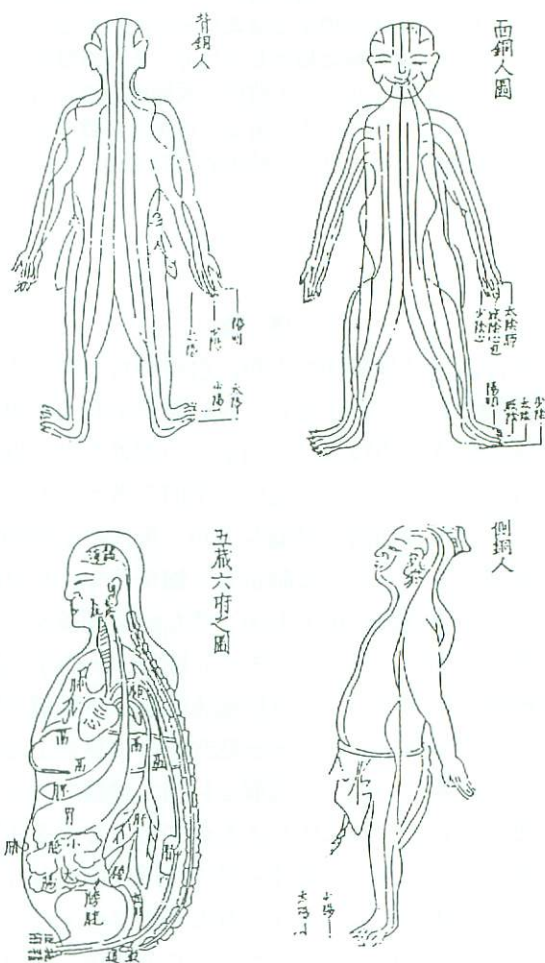
Key Words : Key Words: 鍼灸医学、経絡図、モデル理論、アナロジー、伝統医学 Acupuncture, Meridians, Model theory, Analogy, Traditional medicine

† 連絡先：〒629-03 京都府船井郡日吉町 明治鍼灸大学 人文科学教室

科学の自然についての主要な見方である機械論と比較してみればその違いが際だち、あるいは科学的でないとか、形而上学的だとか評される理由にもなっている。この西欧的な機械モデル的自然観に対して、中国医学の特徴を比喻モデルと捕らえる論がある²⁾。天地と人体が類比的に見られており、ミクロコスモスというイメージ、地形と体の現象を共通の用語を使って表す水系モデル、対流モデルなどが形成されているからである。さらに古代社会の反映でもある官僚制度まで星座などの自然現象に読み込まれ、モデルの特徴にもなっている^{3, 4)}。「気」は万有の実質とも根源ともなっている⁵⁾。宇宙世界を形成している中核的モデルであるが、それにさらに陰陽と五行の思考原理が加わって、古典的なシステムが形成される。この特徴は、宇宙論のような理論形成に留まらず、社会生活や個人の倫理、医療の実践にも及ぶわけであるが、本論では診断や治療などの臨床的問題を直接取り上げるものではなく、ただそれらの基礎的考え方の一つになっている経脈に的を絞って考えてみよう。

古典思想で最初の医学書とされる漢代の黄帝内経には、その霊枢の部分にすでに実践的な、臨床に直結する経穴経脈の記述がある。体表の一定の位置が規定され、その属する経脈の名称がそれに結び付けられている。もちろん今日読まれているテキストは、後代に度重ねて書写され、加筆もされて伝えられたものであるのは確かだとしても、その理念や臨床的価値については基本的に同様として扱ってもよいようである。そして、それを生み出した思想としてみれば、さらに遡って戦国時代に医療思想としての経脈も臨床目的の経穴もすでに知られ、応用されていたと推定できる^{4, 5, 6, 7)}。それがどのようにイメージされていたのかを示す直接的資料は欠けているが、内経に先だって早くからそれを叙述しあるいは描写していた資料が存在していたと間接的に推定されている⁵⁾。その明堂経や明堂図が実際にはどのようなものであったにせよ、下の挿入図に示した人体図のイメージと大差なかったであろう。この図は『鍼灸聚英』(1537)に掲載されているもので⁸⁾、明代に描かれたものである⁹⁾。この図を収録している書の最初の部分には、12経脈が存在する事、その走路、名称に付けられている各臓器と関係がある事、端で相互につながって気血が循環してる事が述べられて

いる。この書ではもちろん経穴との関連を念頭において描かれているのであるが、一応切り離してもイメージできる事、独立して考えられる事を示しているとも言えるであろう。最近の研究で、臨床の歴史では鍼法が現れる前にまず灸が用いられていたとされるが²⁾、施灸をする位置の選定をする際に、あるいは初心者を指導するために、このようなイメージがまず描かれ用いられていたと考えられる。



鍼灸聚英に掲載された明堂図

挿入図に見られるように、こうした人体図には2種類ある。存真図と呼ばれるいわゆる解剖図に類するものと、流注図といういわば人体経絡モデル図である。これらは早くから並べて描かれていたようである¹⁰⁾。人体解剖図は観察を基にして描かれるものであるが、古代社会の精神的制約などの事情を考えれば、今日の解剖学的知識に比べれば不十分なのは当然である。しかしその当時の形態的観察が中国で特に遅れていたとは言えない。

ただ諸臓器の機能的な面での正確な認識はまだ欠けていたから、生命活動におけるその位置づけは主として推測であり、それで全身的システムの中での役割が決められていた。そうした考え方から、目に映る臓腑の形についても、それらを描く際に、経脈の流れとしての機能と容器としての各臓器の関連付けによる影響が現れている。

しかし問題はもう一方の流注図または明堂図といわれる人体モデルの性格である。人体の内部で気血の流れる経路を示しているわけであるが、一種の概念図であり、解剖図とは性格を異にする。いわゆる経絡図である。あるいは存真環中図とも呼ばれる。

経絡図のアナロジー

存真環中図は、臓器の位置関係を図示するとともに、人体の中の気の循環経路を描いた図である。文献では、内臓の位置関係を示す存真図と併置して描かれている。つまりいわゆる解剖図とは違った種類のイメージで描かれているということである。それは各種の気の流れを示すイメージであり、その循環経路が描かれている。気のある種の流体として実体であるかのごとくに見る見方もあるようであるが¹⁰⁾、実体的なものを指示しているとするより、フローチャートのように、機能を流れとして捕らえているとするほうが、多少の矛盾を含んではいても（表現は実際の物の流れを示す）、少なくとも歴史的に用いられた初期の頃の図の構想にむしろより近いと思われる。もちろん、解剖の知識が不完全なことと並んで、この機能にしても想像による理念的側面の強い事は否定できないが、機能の図式的把握としてその性質を検討する価値はあろう。形態的、実体的知識が増大するにつれて、血管や神経の走行との整合性を考えて説明されるようになり、したがって理論は複雑化し、観念的な要素が増したとも言える。

今日の鍼灸の経絡図で、経絡の脈の線だけが描かれているものはほとんど見かけない。すなわち、経穴相互間を結ぶ線として表されているのが普通である。経絡理論として体系化されたものの図示であるとともに、人体図が古代から実用目的で、医療の実践や教育の便宜を意図して描かれている以上、本来的に経験的実践的治療点である経穴、すなわちつばの位置を教えるのに好都合な描

き方をした図になっているのは当然であろう。流れという基本の考え方は、理論より実用を優先させることにより、背景に退いたと見て良いだろう。経絡のシステムを現代的に「暗在系」などと捕らえようとするのも、それと同類の考え方である^{11, 12)}。

もう一つ重大な経絡図の性質は、経絡システムの開放性である。流れとか循環といっても、それは人体内部で完結した物として考えられているわけではない。気は人体の開口部や、経絡の末端部において外部世界と通交している。宇宙全体の気の流れの中で、大循環の中でのそれぞれの個体としてのシステムを形成しているのである¹³⁾。これも同様に、単なる生理学的、肉体的機能以上の事態を言い表そうという意図であるのは明白である。気が出入するといっても、これもメタファーで物体の空間的移動のことではなく、同じ根源から活かされ、同じ法と秩序に従っているという意味であらわしているのであろう。

明堂図のモデルとしての性格を考察する前に、ここでモデルということについての考え方をまとめておきたい。

モデルの実在性とアナロジー

モデルの語は、日常的にも学問的にも、多岐にわたって用いられているが、それはその元にあるアナロジーの概念が多様だからである。ここではもちろん学問的範囲の論議であり、科学におけるモデルの問題が中心である。しかしそこでもまたいくつか異なった意味で用いられており、東洋思想におけるモデルの検討に関連する範囲に限定して検討するが、まず一般的にモデルの種類やアナロジーの違いを整理しておこう。

モデルとは、前述のようにある物または事柄について、それを類比的に表現したものであり、アナロジー関係にあるなんらかの模型あるいは図形などのことを一般に指しているとしてよいだろう。

技術的な研究目的で、対象の外見を模した縮小モデルやレプリカ（複製）を造ることがあり、また理論や数学的内容についてもそれを例示する論理的・数学的モデルのようなものが作られることもある。前者は科学においてよく利用される単純な形態のモデルであるが、後者は公理を満足させる一連の存在を指し、ダイアグラムや関数表など

多様な形式を取りうるが、形式的科学におけるこの種のものをヘッセは論理モデルと呼んでいる¹⁴⁾。それに対して非形式的科学では、複製や同型が特徴のモデルが説明目的や作業目的で利用される。風洞模型や結晶模型などがそれであるが、同型性があるとは言え、いくつかの限定された関係で対応しているだけで、理論が基になっていることから、アナログマシンという言い方もされる。実際のモデルでは、この論理的・数学的モデル性と複製モデル性の両方が見られるのが普通である。

科学的研究で用いられるモデルとしては、解説や研究目的の単純化モデル（理想気体や熱の流れ）ーデスパーニアは縮小モデルもこれに加える¹⁵⁾ー、理論構造の表現とでも言うべき理論的モデル（光の粒子、分子・原子の模型、宇宙像）、さらに社会事象のような大まかな動きを視覚化する確率論的モデルがある。この最後のものはむしろ上述の論理モデルに近い。

モデルには対象の模倣という面があるが、その種類に応じて、対象とそのモデルとの間にいろいろな類比関係がある。複製モデルの場合には実質的な相似性があり、同型モデルの場合には形式的構造の相似性、つまり同一の公理系と演繹が土台になっている。

モデルを考える上で肝心なのは、相違と相似の両面が必ず存在することである。相似すなわち肯定的類比(positive analogy)と否定的類比(negative analogy)である。その見極めがないと、モデルとしての有効性を語ることはできない。どの点で、どの範囲で類比関係にあるのか、物質的に類似しているのか、形式的システムとして相似なのかなどということである¹⁶⁾。

モデルの科学的研究における意義、必要性については、議論の分かれるところであるが、それは個々のモデルを問題にするとときに考究することでよい。ただ実在性との関係について述べておきたい。

モデル一般としては、その実在性は当然対象の実在性に依存するわけであるが、モデルが表象しようとするものが実在そのものかどうか、対象の実在的側面を現すかどうかは問題になりうる。論理モデルのようなものは、実在との関係は問題にならないが、物質の波動モデルなどは、それが実在を正しく言い当てているかどうか、知られてい

る物質の有する諸性質と矛盾しないかどうか問われることになる。つまり、論理的システムのアナロジーなのか、実在と想定された事態のアナロジーなのか、それとも現象の元になっていると解釈されるシステムのモデルなのかが問われなければならない。

明堂図のモデル性

東洋医学について、神秘的だとか哲学的だとかいう印象をもたれることがあるのは、長い歴史と伝統を有するその臨床的实践が、その背景として特徴的な理論ないし世界観・人間観を伴っていることに由来する。それがそうした性格を生み出しているのである。それはどういう内容の人間観であり、どういう種類の理論及び概念なのか、どういうモデルが描かれているのか、それをいわゆる経絡図に基づいて検討してみよう。その臨床的实践的価値や正当性はここでは論外であり、ここでは基礎的概念の性格に議論の範囲を限定し、治療的实践の足場の一つの検討と評価にとどめたい。また議論に際しては、東洋思想・医学の用語ではなく、今日の用語法に置き換えて行こうことになるが、それには著者の解釈の結果も入っている。

人類の思想史は、時代のずれはあれ、ある程度共通した段階を経て発展してきたと見ることができる。すなわち、古代的とか中世的という形容は、それぞれの文化の歴史について、内容的特質には大きな違いがありながら、幾つかの点で当てはまると言えるようである。古代的特質は自然環境や物質的条件による限定であり、居住する世界についての知識の限界である。その反面精神性、宗教性の優位が一般的である。それが生み出したものが神話であり、精神的世界観である。

中国古代の文献には、神話的資料が比較的少ない。早くから哲学的思索がなされたと言ってもよい。しかしその哲学は、主として人生論とか処世訓に類するもの、歴史的教訓であって、あまり形而上学的、体系的なものではない。豊かな歴史記録文書が編纂され後世に伝えられているが、そこには独特の史観があり、人生観人間観の特徴が現れている。王侯の事績など歴史的出来事が忠実に書き残されている反面、概念による抽象的表現にまでは一般化されておらず、パラダイムを具体例で語るほうが好まれたと言えるかもしれない。

しかし超越的存在, 天上的な事柄は直接形象化できないから, 何らかの比喩が使われることになる。それは説話や神秘的象徴の世界である。中国古典の記述に大きな影響を与えている神仙思想や仙術, また錬丹術・錬金術はそのようなものであろう。抱朴子の語る仙丹の術などは, ヨーロッパ中世の錬金術 (ヘレニズム) と共通する思想を示している¹⁷⁾。

(天地人の概念とモデル)

「天地万物は, そして人体はすべて気から成る」¹⁸⁾

この天と地と万物, 人 (体), そして気は古典のキーワードである。古代思想の基本的特徴がこれらによって代表されている。これらのモデル性を検討するため, 古典の中に使われている用語から, まず天と地, そして形を中心に検討してみよう。形はモデル性を探るために最も近い概念である。これらの概念ないし用語は, 医学書に用いられる以前に, 早くから文献の中に現れている。概念といっても, 名辞を類と種差によって定義するアリストテレス以来の西洋的論理における用語法ではない。様々な記述の中に, いろいろな文脈で使われている概念を手がかりにして, その意味を探索しかない。いきおい多義的であるが, それが東洋思想の特徴にもつながっている。「不立文字」という言語表現の限界性の自覚や, 現実のもっと奥に実体を, 万物の根源からの由来を見ようとする重層的な根源思考法などが特徴である。これについては後でまとめて考察する。

天地という語は, 文字通りまず自然界のことを指している。しかし文献の中でこの語が比喩的に, 類比的に使われている場合が多いのは明らかである。その広義の使い方は古代言語の未分化と見ることもできるが, 上に挙げた中国的思考法の特徴とも関連する^{19, 20)}。天帝, 天職, 天功, あるいは人体における天地など, しかしそれらには概念的意味の共通性と共に, ある共通のイメージを伴っている。つまり自然界で感じられる具体的な現象の感覚が残り, それら相互のアナロジカルな関連づけをしているのである。それを基体にして物事の本質が語られる。

「天地自然は生命の根源である。天地が無ければ生は存在しない」²¹⁾と「天地」の根源性が語ら

れるが, それは原理的な事の表現である。事物の根本としての原理性は, 「天の出来事は一定普遍である」と, その普遍性・永遠性への言及もある。ところが, 「天は必然的に推移するものであり, 恨んではない。..... 天の四季の変化は定まっております, 地は生産するから, それに逆らってはならない」²¹⁾のような箇所では, それが法則であるとともに倫理的な指針でもあると言われているようである。客観的自然法則というより, 倫理規定としての世界の法である²²⁾。

さらに天地は活動的な原理でもある。「天地が合体して万物が生じ, 陰陽が接合して変化が起き, 自然性と人為が合して世界は平和になる」では²¹⁾, 自然の生産力としての天地と, その作用原理としての二分法が指摘され, さらに人類の運命とのつながりが述べられているのである。こうした天地の本性, 人間を規定する掟としての性格の付与の考えは古く, すでに左氏伝でも同様の事が述べられている²³⁾。

このように原理として理解された天地は, 自然現象としてのイメージが完全に払拭されてはいないとしても, そのものとしては不可視なわけであり, 形が無いとされるのも当然である。この形の概念については, 次の問題点として取り上げる。この原理としての天地は, 後代南宋の朱子により自然界の理として, 宇宙の気についての法則と理論付けられ, 新儒学が形成されるが, それもやはり人間の本来の性を指し示す事柄であって倫理性を伴うものである。即ちいわゆる自然法則とは違うし, また神による創造や造化ではなく自然に生成するものであり, むしろヨーロッパの17世紀頃までの自然法の概念に近い²²⁾。

このように天地は根源性を有する自然界の形象である。それを通して宇宙世界の実体が探られるのである。それでは古典では「形」はどんな意味を持つ語なのか。

淮南子に, 「形が崩れていれば精神も乱れている」²⁴⁾などとある場合に, 形は精神と区別される身体的側面であると言っているように, 古典では形が人体を指していることが多い。また「形に表れるものは形そのものではないから, 生成の止むことはない」と述べられる場合, 形つまり目に見えるものは生成変化するのを特徴とするから, 一定することはなく, 形の本体を見ているわけでは

ない。しかし生命にとり形は本質的である。「生命は形と同じ根源を有する。形があって初めて生命となり、好悪の感情も生ずる」。身体は人間の生命の必要条件であり、そこに現れる人間活動は根源に由来している。宇宙を満たす根源物質としての気と人間活動の原動力としての精神との関係は、「形態は生命の宿るところであり、気は生命の実質であり、精神は生命の統率者である」とされる。²⁴⁾

このように体という形は、単なる外見の姿だけではない。宇宙の気という実質に満たされ、根源による生成を具現しているとともに、その反面世俗的欲望にのみかかずらっているうちに、必ず外形も束縛され、精神的に散漫になり、そのために心身虚脱の病にかかるのを免れないことになるのである。

またこうした根源は上述の天と同一の事を指している。つまり道家思想のtao（道）と同様の根源性である。そして形は正しく位置付けられなければならない。道または天を大切に思う者は、一定の形式にこだわらぬよう注意が必要である。固定観念を持たなければ、それに束縛されることもない。また天は絶えず生成する根源であるから、心身もそれに合うよう努力が必要なのであり、したがって形式をおろそかにするのも愚かなことなのである。²⁴⁾

同様の考え方はすでに五経にも現れている。例えば礼記など。²⁵⁾ 莊子も、人間の外貌は形の無いもの、つまり道により定まると言っている¹⁸⁾。

つまるところ、形は内面から作り出されるものであり、根源の生成にかかるものであるとともに、その内心の活動は外部に現れているのである。顔かたちには現れているのは、内面の感情の動きである。²⁵⁾ この意味でここに語られている形にはモデル性があると言えるだろう。形ある世界現象をモデルとして見ていると言える。

この事はもちろん医術の基本思想にも影響している。古典医学思想には道家思想との深い関係が認められるが^{26, 27)} 根源の道が言葉では表せない、目には映らないものであるように、身体における根源的なもの、形そのものは見えないとすることもそれに対応しているのであろう。むしろそこに事の実相を読みとるべきことが強調される²⁸⁾。万物が生じてくる一者、そこから形を受けている根

源なるものは、むしろその働きにおいて重視されている。「明らかに現れているものは奥深く暗いものから生まれてくる。形のあるものは形の無いものから生まれてくる。精緻で霊妙な働きから生まれてくる。そして万物はそれぞれにその形体に従って生まれてくる」¹⁸⁾とあり、現れた形は根底を表していると言えるのである。

経絡の実在性ないし現実性について

人体中を流れる気の存在とその経路としての経絡の実在性について、その事自体を論じている箇所は、少なくとも古典の中にはないようであり、むしろ現実存在していると前提した上で論じられている²⁹⁾。つまり実在を証明すべき対象として取り上げるのではなく、その存在が理論的にも臨床的にもすでに基本的認識になっている。これはむしろ実在ということについての考え方の違いに由来するものであろう。

物体や物質的現象については、適当な手段を使えば、少なくとも間接的には感覚的に実証できるとするのが自然科学的方法論の考え方であり、それには正しく推論することや、再現可能性などがその条件になっている。

ただし現実と感じられるからといって、そのまま実在するとは限らない。錯覚や幻視のようなことは論外にしても、最近の技術の成果として話題になり、実用的な価値も認められているバーチャル・リアリティがある。この語は「仮想現実」という訳語になっているが、その場合の現実とは如何なる意味か。バーチャル・リアリティは装置が作り出す主として視覚的イメージ空間の中で、人が3次元的な人工の、つまり現実ではない場の中で行動し、それに応じて変化する対象を前にしていると現実的と感じさせられるというわけである。それで航空機の離着陸のシミュレーションもできるし、ゲームを楽しむこともできるとしても、それが言う「現実」は「感じる」ように仕組まれているだけであって、その実在を云々すること自体無意味であるし、その体験で現実についての新たな発見ができるとはあまり期待できない。ミハエル・ハイムは「バーチャル」の語を、時代を遙かに遡って中世哲学者のドゥンス・スコトゥスの言った「潜在的」存在の意味に結び付けて考えているが、スコトゥスの場合には「仮想」の意味はなく、

やはり何らかの実在性が言われているのであって、感覚的現実感とは正反対のことである^{30, 31)}。

また自然科学においても実在や現実性が問題にされることがある。近代自然科学こそ本当の実在を対象にしている学問だと主張されることがある。しかし自然科学の本来の対象は日常的語り方で表現できるほど単純ではない。何らかの現実を扱っているといっても直観では片づかない理論があり、さらに絶えず新しい理論が立てられ、その訂正が繰り返されるのが宿命である。つまり仮説によって理解しているのである。仮説だから現実ではないということにはならないが、実在の絶対的理解は主張できないし、またされてはいない。自然科学が自然の合理的理解と定義される限り、現実の実在性を問うという問題の立て方はしない。それは自然科学の課題ではないからである。仮説は感覚に触れる現実の理解ではあるが、その現実そのものの実在性は前提にされている。

生命現象は別として、現代物理学は物質界のあらゆる現象の原理を扱い、統一的な記述を可能にし、統計的に予言する方法をもつに至っているが、それが対象にしている現象を単純に《存在》と同一視するわけにはいかない。量子力学者のデスパーニアはこれを、「人間の感覚や実験的方法は、たとえ理論の助けを受けたとしても、何が本当にあるのか、つまり実在するのか、という問題については、確実なことをわれわれに教えうるわけではない」¹⁵⁾と表現している。科学の領域は、科学の本性そのものによって経験的実在に限られているのである。

西欧の科学史における錬金術や魔術が描く人体のイメージには、明堂図にいくらか似通ったところがある。しかしそうした近代科学の母体になった伝統的な西欧の技術には、古代からの精神的伝統として、物質支配への関心が強く、それが図の中にも反映している。加えてテーマやシンボルにはキリスト教思想の影響が随所に見られる。聖書的人間観により、人間を神の似姿(imago dei)と見ることが基本にあって、人体に神や自然界、宇宙の象徴を読み取り、また描き、神秘を感じさせようとする術だからなのである。物質の原理を極めようとする精神が基本にあるといえる。

それに対して鍼灸医学の母体になった中国古典の医術は、関連する道教的な不老不死の思想と並

んで、人間の生への関心が中心であり、常に如何に生きるべきかという人間の性(さが)の追求と無関係ではない。宇宙の本性を読み取り理解するための、説明原理を求めているのである。物質支配のための原理の追求というより、天地と人の間に共通する法(のり)を、従うべき正しい性を価値あるものとして優先させる。価値観の違いである。少なくとも伝統的医術においては、この精神が支配的である。これは宇宙全体の中において人間存在を見るという点でホリスティックな生命観とも言える³²⁾。

このことは現代でも、伝統的東洋医学の生命観として受け継がれているものであろう。

結 論

東洋医学の基本的な用語は、一般化して使われている限りで概念と称してよい。社会制度や慣習などを云々するのには抽象語も使われている。

しかし基本的語彙については、中国思想の特徴として、西欧の伝統的論理学のように、定義により内包外延を限定してしまうことは好まれないとされる。具象性を残したままで使われるから、文脈の中で意味が限定されるが、曖昧さは残る。しかしそれは、万物が(気において)結ばれている、一つのものから出ているという基本的世界観に基づいている。

これを一種のメタファー(隠喩)と見ることもできる。外見の類似や現象のつながり、連想や類推などで関係付ける。批判的な発展はありうるとしても、感覚の範囲に留まっている。自然科学の歴史においては、中世的錬金術的アナロジーとしてのメタファーは、科学的思考法への発展によって批判され否定されてしまった³³⁾。アナロジー思考は、異質的部分を多数含むものを統一的に把握しようとするならどうしても必要である。全体として見る、つまり人間を中心として統一的に解釈することになる。しかし人間も含めた宇宙全体を相関と捉えること自体が一つの立場を形成する。だから無理なこじつけや、数や語のごろ合わせは不要であろう。部分的知識は部分として評量することである。そしてその上で細部についての刷新は可能である。基本的構造を再検討して、思考原理を活かす道を探ることが発展につながる。

古典的理論に現象論的側面、解釈学的性格を認

めることもできる。物ではなく事を見ようとする立場は、むしろ東洋思想の特徴をなすものである。抽象化はあくまでも認識の手段であって、体系を立てるためにはそれが必要である。しかしそれがもつ仮説的側面は、修正を続けることを求める。また言語の具象性を保っているとい点には、現実との接触を保ち続けるという利点がある。いわば「精神」における宇宙論が語られるのである。

明堂図、経絡図をモデルと見た場合、どんな性質のモデルか、という問いに、モデルについての視点を変えることによって答えを考えた。上述のように、モデルは一般に意図的な表現力や表現対象について用いられることが多い。しかし明堂図、経絡図という人体図は、人体という空間的な事物の描写であり、物質的な存在のモデル図であるに止まらず、むしろ目には映らない対象のモデル図でもある。その対象は世界についての理念であり、物質的構造形態や機械的からくりではない。

明堂図が医術の臨床という実践目的に役立てられるという点については、それに関連する問題が生ずる。それはここでは論外にしたが、その出発点には重層的思考構造による根源的存在性を描き出そうとする意図が認められる。そうした視点の変更からすれば、天地や人体はそれ自体がモデルとして形成されているという見方が基本になっていると言える。言い表しがたいもの、一なる根源が原動力となって生成する、「生きるモデル」と表現してもよいかもしれない。個々の事象および全体がモデル的存在だと考えられていることになる。そのモデルにおいて、人または世界のあり方、生き方の範型や指示をも見て取ろうということにもなっているのである。

参考文献

- 1) Beardsley Monroe C: Metaphor. The Encyclopedia of Philosophy, vol.5, Macmillan Publishing Co., Inc. & The Free Press, N.Y., 1967
- 2) 山田慶児: 中国医学の思想的風土, 潮出版社, 東京, 1995
- 3) 薮内清: 中国文明の形成. 岩波書店, 東京, 1974
- 4) 加納喜光: 中国医学の誕生. 東洋叢書2, 東京大学出版会, 東京, 1987
- 5) 石田秀実: 中国医学思想史—もう一つの医学. 東洋叢書7, 東京大学出版会, 東京, 1992
- 6) 加納喜光: 大地に流れる『気』. しにか, vol.4/ No.11, pp.27-33, 大修館書店, 東京, 1993
- 7) 藤木俊郎: 鍼灸医学源流考. 素問医学の世界, 續文堂, 東京, 1974
- 8) 明高武纂集: 鍼灸聚英. 上海科学技術出版社, 上海, 1961
- 9) 篠原孝市監修: 鍼灸節要・鍼灸聚英. 臨床鍼灸古典全書49, 中国資料(九), オリエン特出版社, 大阪, 1993
- 10) 石田秀実: 気・流れる身体, 平河出版社, 東京, 1987
- 11) ボーム D (井上他訳): 全体性と内蔵秩序, 青土社, 東京, 1986
- 12) ボーム D: 暗在系と東洋的瞑想 (インタビュー). ニューサイエンスと気の科学—科学・技術と精神世界3, 青土社, 東京, 1987
- 13) 石田秀実: 人体をめぐる『気』. しにか, vol. 4/ No.11, 21-26, 大修館書店, 東京, 1993
- 14) Hesse Mary: Models and Analogy in Science. The Encyclopedia of Philosophy, vol.5, Macmillan Publishing Co., Inc. & The Free Press, N.Y., 1967
- 15) デスパーニア B: 現代物理学にとって実在とは何か. 培風館, 東京, 1988
- 16) ヘッセ M (高田紀代志訳): 科学・モデル・アナロジー. 培風館, 東京, 1986
- 17) セビン N: 中国の錬金術と医術. 思索社, 東京, 1985
- 18) 市川安司, 遠藤哲夫: 荘子 下. 新釈漢文大系8, 明治書院, 東京, 1967
- 19) 中村元: シナ人の思惟方法. 東洋人の思惟方法, 春秋社, 東京, 1988
- 20) 山田慶児: 混沌の海へ—中国的思考の構造. 朝日出版社, 東京, 1982
- 21) 藤井専英: 荀子 下, 新釈漢文大系6, 明治書院, 東京, 1969
- 22) ニーダム ジョゼフ: 中国の科学と文明 第3巻 思想史 下. 思索社, 東京, 1975
- 23) 鎌田正: 春秋左氏伝 3, 新釈漢文大系32, 明治書院, 東京, 1979
- 24) 楠山春樹: 淮南子 下, 新釈漢文大系56, 明治書院, 東京, 1988
- 25) 竹内照夫: 礼記 中, 新釈漢文大系28, 明治書院, 東京, 1977
- 26) 福井康順他監修: 道教の展開. 道教 第2巻, 平河出版社, 東京, 1983
- 27) 南京中医学院医経研組 (1991) (石田秀実監訳), 黄帝内経素問—現代語訳上, 東洋美術出版社, 市川, 1991
- 28) 阿部吉雄, 山本敏夫: 老子, 新釈漢文大系7, 明治書院, 東京, 1966
- 29) 戸川芳郎: 気一元論. 気の世界, 東京大学公開講座50, 東京大学出版会, 東京, 1990

- 30) ヘルセル サンドラ, ジュディス P ロス編(広瀬 監訳) : バーチャルリアリティー理論・実践・展望. 海文堂, 東京, 1992
- 31) Geisler, Linus S. : Virtuelle Realität. Universitas 3/1995, 50. Jahrgang, Nr. 585; pp. 264-272, Wissenschaftl. Verlagsgesellschaft, mbH, Stuttgart, 1995
- 32) 丸山敏秋 : ニューサイエンスと中国伝統医学—ホログラフィックな身体. 竹本忠雄他編 : ニューサイエンスと東洋—橋を架ける人々, 誠信書房, 東京, 1987
- 33) Gentner Dedre, Michael Jeziorski : The shift from metaphor to analogy in Western science. Metaphor and Thought 2.ed., ed. by Andrew Ortony, Cambridge Univ. Press, Cambridge-N.Y., 1995

Meridians Map and Model Theory

NAKAMURA Kiyoshi

Department of Humanities, Meiji University of Oriental Medicine,

Summary: Acupuncture medicine, an important part of traditional oriental medicine, is based on the theory of specific meridians in the human body. Acupoints along these meridians are depicted on body sketches or models, which have been used in practice from ancient times to the present. However, the presentation on some models significantly differs from anatomy models used in modern medicine. The characteristics of this theory are understood through specific insights into the cosmos and human body, deeply influenced by oriental thought in the early era, i.e. deep-layered thinking. The meridian plates are modeled according to the specific theory, but differ from the models used by modern sciences. The universe itself is viewed as a model in the traditional, oriental science and medicine, as our study concludes. So to speak, nature is a living model for the human being, indicating the truth and law of the world and even the way of life, "tao". Therefore, such a picture or model with meridians also contains features of ethical character and includes a holistic view.